

【島の水から想うこと】

沖縄県 下地中学校 一年

仲地 なかち
亜緒 あお

この世界には、豊富な水に恵まれている地域と、水不足に悩まされている地域があります。同じ地球にいても、水は平等にあるものではないことは知っていました。私は暮らしの中でたくさん水を使っていないながら、水の大切さを実感したことはなく、当たり前にあるものだと考えていました。ある二つの事を知るまでは…。

私の住んでいる地域は、農業がさかんです。葉たばこやさとうきび、かぼちゃなどの野菜が多く育てられており、畑が広がっています。近くに製糖工場があり、収穫の時期になるとトラックに積まれたたくさんのおさとうきびが工場に運ばれ、独特の甘い香りがただよってきます。このように農業がさかんな光景は、幼い頃から当たり前前のことでした。ある日、父から「地下ダム」の話を知りました。地下ダムとは、地下に流れた雨水を地中で貯めて利用する施設です。宮古島には隙間が多い琉球石灰岩と、その下にある粘土質の地層という環境が、地下ダムには最適だったそうです。この地下ダムのおかげで、今の宮古島の農業がある。と父は言います。地下ダムのなかった時代の人々ほどのような暮らしだったのでしょうか。雨水に頼るしかない水なし農業で、干ばつのたびに農家は大きな被害を受けていました。現在でも、島の大きな産業であるさとうきびが、被害を受けていることは、とても大変だったと思います。地下ダムによる、安定した農業用の水の確保が、人々の暮らしを守っているのです。今のように農業がさかんになったのも、どこまでも広がる畑の風景も、製糖工場から漂う香りも、すべて私の島の当たり前前の景色でした。しかし、それは当たり前前のものではなく、昔の人々が島の地形や地質、環境に合わせて工夫して考えたからこそのものでしたのです。私は、先人たちの工夫と、水の恵みに感謝と感動の気持ちでこみ上げてきました。

また、水について調べてみると、地球のたった二割と言われている真水の中でも、飲料水として使える水は、ほんのわずかだと知りました。そして、水を巡っての紛争もあるということに驚きました。水不

足で悩む国の人々は、生活に必要な水をどうやって手に入れているのでしょうか。幼い子供たちが水を汲むために学校へ通えなかったり、水がないために命を落としたりしているのです。当たり前前が、当たり前前ではない世界があることを、私たちは一人一人考えていく必要があります。

そこで私は、このような水の不平等をなくすためにどうすればいいのか考えてみました。中学生の私に出来ることは、身近で小さなことですが、使わない時には水をきちんと止め、お皿洗いやお風呂も、できるだけ最低限の量を使うよう心がけることです。これは、意識するだけでも変えることができると思うので、実行していきます。

私たちの元に届くまで、水はどんな旅をしてきたのでしょうか。雨が地中にしみこんで、湧き水や、川、ペットボトルの水、地下ダムの農業用水として、私たちの目の前に様々な姿で現れます。水は地球をめぐって旅をしています。そして、その安全な水がいつでも私たちに届けられるのは、「先人たちの工夫」があるからです。安心して毎日を過ごせる、当たり前前は、誰かの努力の結晶だったのです。この当たり前前を、世界に届けるには、やはり「私たちの工夫と努力」です。節水や自然を守る活動などの身近なことから、井戸や地下ダムなどの技術を伝えることなど、私たちにできることは、数多くあります。自分自身の行動が、環境や水を守り、美しいふるさとの風景を守っていきます。地球を旅する水が、私たち一人一人に平等に届く日が、「当たり前前」となるように、私はこれからも水を大切にしていきたいと思います。自然の恵みと、先人達の努力に感謝して。